

井3

# 広供養舍利

## 仏舎利縁起

昭和八年九月一日

仏滅後壹百年に誕生して一闇浮提を統一し、八万四千の石塔を建て、普く仏法を弘通せしめし、阿育大王の皇子摩賓陀出家して、楞伽國の開教に渡り、当時の帝都にして且つ教主釈尊親しく遊化し給いし、阿室羅駄布羅の郊外に孤峰特立せる弥賓多礼山に於て、当時の帝王秩沙を狩獵の因縁に由つて化導し、忽ち全国挙げて仏土と化せしめたる、仏法伝来の最初の縁起を祀り來つて今日に及びぬ。仏法の伝来は實にセイロン國の文明史の発端なるのみならず、やがてセイロン國の国史の起源をなしぬ。この国に伝うる所に由れば、星霜を重ねること一千四百七十五年なり。東方所

伝に由れば約三千年を経過したり。その間、帝都も幾変遷するとともに國運も屢々隆替ありしのみならず、アヌラーダプラ市の荒廢と俱に、仏塔仏殿僧坊の破壊に、亞ぐに破壊を以てし、万国無比の大宝塔は齋蒼たる木立となり、徒に群猿の巣とかわり果てしにも係らず、今日尚その往昔の盛大を偲ばしむるまでに、全國の仏教信徒は年々この大祭に参り、廢墟の王城、林藪の宝塔の下に蟻の如く集まり、各々蓮華を供え、燈明をともし、香をたきて、香雲天を焦らし、散華地を覆いぬ。鉄道も半額券を発売し、臨時列車を仕立てて便宜を計りぬ。

去年は鉄道の便を藉りてその祭礼に詣でしが、今年は往復ともに純ら行脚の旅をすべく、五月二十五日早朝、古倫母の道場を起つてキヤンディー、マータレー駅を経由し、道すがら名山古刹に巡礼しつつ約五日を要してアヌラーダプラ市に到着しぬ。約一百五十余哩なり。六月二十五日はかねての懸案たりし旧開港場ゴール市の開教に孤錫蕭然として行脚の旅に立ちぬ。

七月二十五日は旧都キヤンディー市の仏牙寺の大祭典の行列に参加すべく、行脚の仕度にてコロンボを起ちぬ。仏牙寺の大祭典は、前後約二週間毎夜大象に仏牙の宝龕を載せて椰子の篝火を焚き、伎楽を奏し、舞踏をして賑やかに市中を行列するなり。大小の象數十頭が金銀の莊嚴具をつけてこの行列に加わりぬ。かくてこの大祭典は象の行列とも云い得べくおぼえぬ。

去年のこの祭典に始めて玄題旗を建て、法鼓を擊つて参加しぬ。今年は東京より寄贈せし、尺八寸の大太鼓を車に挽かせてこれを擊ち、神戸より供養せられし紫紺の玄題旗を建てて参加しぬ。賑やかなる祭典をして日本の仏弟子の参加によつて更に一層賑やかならしめぬ。

井3

で、宝塔に参り、吾が到らざりし孝養の一分の功德を補いぬ。されば今年も昨日今日は、身延山に詣でて擊鼓宣令の御修行をして、遠く西天の噂ども語り合いぬらむと思ひ浮べて、寂しき二人の間の対話に幾度か繰返して物語りしき。

日本に至いで我れには面白く住みよかりし仏法國セイロンの嶺にも今や又暇を告げて遠く他国に到るべき機会の来るらし。されば今日、即ち八月二十五日に西天身延の仏足山を起点として何れの地にか旅立つべし。セイロンを離る

る第一日の旅は仏足山の麓ギニガッテヘナ駅迄三十哩の坂道なりける。去る二十二日まで二夜三日間断食し、二十三日は仏足山頂に礼拝し、二十四日にかけて嵐窟道場の防水工事を施し、二十五日の朝、跡片附をして寒霞渓の嵐窟道場を出立せしは將に午前十時なりき。いかに急げばとて午前十時より重荷を負いたる上、断食後の疲労の身の三十哩の行程は、夜にからでは到底達し難しとおぼえるにつけても、三十哩休憩なしに歩きつづけ、お茶一杯飲むこともなく、菓子一つ喰うこともせざりき。行脚の旅はいつも断食修行をかねたるが如くなりき。道すがら一尺程の丈けの蛇、とかげ、蛙などの自動車のタイヤに敷かれて黒血を吐きたるまま押潰されたるを十匹あまりもみて、跣足の身には一入氣味悪くおぼえぬ。

未だ半分の道程も歩かぬ頃より激しき雨になりて、荷物も裾も濡れてわびしきに、日影さえ西へ傾きぬ。しばし雨止むかと思えば、黒き雲襲い来つて又降り、又降りしぬ。セイロンに於ける雨量第一の地帶にして一年中に雨期ならざる間は僅かに三ヶ月のみなりと云う。此所高原地方を而も雨期の最中に通ることなれば雨に会うべきことは当然ならむも、陰湿堪え難くなりぬ。道のべに腰おろすべきひまだにも無し。我が前途の暗示にやと想うにつけ、はげみをなして急ぎぬ。雨降らば降れ、風吹かば吹け。定められたる我が旅をなどか果たさでおくべきと歯噛みをなせど、雨は

強まり、日は暮れて雲間に幾重重なる峰の間の一本の曲りまがれる道もおぼつかなく暗うなりぬ。たまたま草刈の人一人に会うて是れより幾哩<sup>マイル</sup>ありやと問えば、なお六哩ありと答えぬ。夜道にして坂道、雨風の中の六哩、殆ど悲しくさえなりぬ。万一にも道にうねる毒蛇を踏めば、跣足の脚のいかがわせん、など案しながら御題目を口ずさみつつあるきぬ。最後の三哩程は急峻なる下り坂にして、道は屈曲に屈曲を重ねて下の深き谿に沿えり。暗き道にて危険さえ感じぬ。かくて午後八時にはようやくギニガッテヘナの御寺につきぬ。あしの裏は硝子<sup>ガラス</sup>の破片に切れて鮮血流れ、靴を穿けば数多くの水泡を生じぬ。

僧房に住持をおとなえ、洋燈片手に扉を開けて案内しぬ。ボイイのすでに寝ねたる者を呼び起して火をたかしめぬ。すでに夜晚くなりて氣の毒なれば、空腹のままに休むことにして、ただお茶を熱く沸かして頂きぬ。住持の僧は我れ等が濡れて寒くなるをみて火を焚いて暖をとらしめ、ボイイを信徒の家に遣して手足を洗うお湯をとり来らしめ、明朝午前六時までに朝食を調え来るよう申しやりぬらし。火にあたりお茶をのんでわざかに空腹をみたしぬ。明朝は曉かけて此所をたち、日影なお涼しき間に下り勾配の自動車路四十哩程もゆいて泊らばやと語りて、床にくこととしぬ。例に依りて住持の僧は旅の僧を講堂に泊らしめんと、椰子<sup>ヤシ</sup>の葉の筵二枚取出してボイイを講堂に遣さんとす。講堂には乞食か旅客か既に一、二名泊り合せたる人もありぬ。我れ等は牛の糞にて塗り固めたる僧房の土間、出入口の扉の傍に臥すべし、講堂ならずとも宜しと云えば筵は直に土間に敷かれぬ。「シウラ」と称する七条の御袈裟を被て二人手枕してしばしの夢路を辿らんと欲すれば、一枚の板戸を隔てて住僧の居間なり。居間と云うとも狭くるしく、むさくるしく湿りをおびたる土間の続きのみ。若干の書物棚と狭き卓子と椅子との間に寝台が据えられたるだ

けなり。

住持の僧傍らに来てセイロンの諸所の靈跡仏塔へ自ら参詣せし行脚の話や、その古刹名山の仏塔におさまれる教主釈尊の御舍利の種々など、由緒正しき歴史の話を物語りぬ。如來の御舍利、白臺相等、多くこの国に起塔供養せられたるを知りて、まことに仏法有縁の国なりしを喜びぬ。

竊に惟うに、如來滅後普く五天に分布せられ、起塔供養せられたる仏舍利は、印度の西北国境より侵入せる異民族、他宗教の圧制迫害に由つて、塔婆は壊滅せられ、石柱をも毀折せられ、仏像をも損傷せられぬ。當時篤信の王者、大臣、宰相、王女等難を脱れて他国に往く時、仏舍利等の貴重なる如來の遺品は、或は髻中に、或は服中に秘められたり。印度の南端と一葦帶水のセイロン国は、純一の佛教國として、亦一世万民一致して仏法の尊崇日に新なれば、印度より難を避けて来れる者、このセイロン国に於て皆悉く塔を建てて仏舍利等を供養しぬ。バルマ、南洋、ジヤバの諸島にも分布舍利起塔供養の仏事行われたりと雖も、セイロン国に比しては地理的に遠隔不便なるを免れず。最初印度に仏法全盛の時代より仏法滅尽の時代に亘って尤も多く仏舍利の伝来せしは蓋しセイロン国第一なるべし。

最後に住持の僧曰く、我れも歐州大戦當時コロンボのマリガカンダに留学せしが、當時日本兵が上陸したりければペーリ文の御経本を各兵士に施本しぬ。その数約五百人なりける。いかなる因縁にや、我れ甚だ日本を愛樂す。今夜日本の僧がこの寺へ投宿せられたること歓喜に堪えず、感謝申し述べ難し。吾れかねて仏舍利を秘藏せり。今夜拝観せしめんとて自ら室内を淨め、机をかざりて、仏舍利を取出しぬ。我れ等は信徒のもて來りしお湯にて頭より爪先まで洗い淨めて仏舍利を拝観しぬ。さすがに日本は、西天と東土と二十万里の海山遙に相隔りければにや、仏法繁昌の国

ながら、或は他土の教主を祭りて弥陀<sup>みだ</sup>の名号を唱え、或は法身如來を祀りて梵語の經文を誦し、或は諸天善神に心を入れて數々現世の五欲を祈り、未だ一として正直に釈尊を崇め奉る宗旨なかりき。聖德皇太子、仏舍利を握りて御降誕遊されしよりこのかた、五重の宝塔の頂上にあがめ奉らせ給いしと雖も、その後仏舍利の伝来甚だ多からず。近来シャムの皇室より贈らせ給える仏舍利は、名古屋の覺王山に藏まりと云う。されば從来仏舍利には親近供養の縁欠けたる我れ等、今夜忽ち親く仏舍利を礼拝し觀見することを得べしと聞いて、無限の歓喜は満天の雲の如く湧きぬ。

指端大の黄金の多宝塔はひらかれて、中に黄金の蓮華ありて蓮華の中に仏舍利は秘められたり。我れ等恭しく三敬礼し、御自我偈の舍利供養の文を誦し、御題目を唱え、御太鼓を擊ちて法樂し奉りぬ。これはこれ、嘗つて靈鷲山にてその小き舍利粒に指紋すらあらわれ給えりと云う。上行菩薩の頂を摩でて御題目を附属し給えるその御指にてありけるか、歓喜は胸に溢れてやがて目に涙となりてせきあげぬ。これはこれ夢には非るか、夢なるか。かかる不思議の因縁の有り得べきか、勿体なくして我れにもあらずなりはてぬ。身心ともに大歓喜の大海におし出されたる如くなきなる人が所望しても分授すること能わざりきと物語りぬ。我れ等があまりに歓喜する姿をみたればにや、再び此所へ来る日は何時ぞや、我れこの御舍利一粒を授与すべし。この仏舍利は今夜不思議として忽ち授与せんとする心になりぬ。次の日に此所を通らば仏舍利を授与すべしと云われぬ。言語に自在ならぬ我れ等には仏舍利分譲の住僧の御

話は、何かの聞き違いかとも疑いながら、また二人して喜び合ひて床に横らんと欲すれば、住僧また室より立出来りて将来この地に建立せんと欲する摩訶毘波羅の設計図を取出し來つて示しぬ。この模範は旧都ボロンナルワの某大王の建てし毘波羅にして現今は只礎石のみ残れりと云う。宝塔を建てこの仏舍利を安置し、宝塔の正面に坐像の仏像を安置し、宝塔の上に屋根を覆うつもりにて、とても広大なる規模なり。かかる辺僻の小寺院の住僧いかがしてかかる大建築を発願し成就せしむるやらんと驚かれ怪しまれぬ。住僧はこともなげに自ら仏蹟巡拝の際ボロンナルワの廃跡をみて転た復興の志を起し、何時かは斯の如きものを建てばやと念願止むこと無くして遂に此所に到りしものなりと云う。堅忍不拔の根気うたた輕佻の者を慚死せしめんとす。重いで謂く、今夜日本の仏弟子に会うて歓喜窮り無し。今はれより仏舍利を分譲すべし、再び我が室に来られよ、と云つて招かせ給う。聞き違ひならずしてまことに仏舍利を授りぬるやらん。然らば彼の粟粒大的御舍利を紛失することなく何の中に秘藏して旅行すべきかなど案じ煩いながら、また住僧の室に入れば、一本のお蠟燭を御燈明として再び黄金の塔は取出されぬ。黄金の宝塔の中の黄金の蓮華の中に細く白き一粒の仏舍利を、モミの絹を裂いて包み、たしかに藏め奉つて宝塔のまま我が掌中に置かれぬ。仏舍利を授かるべしとは聞きにしが、さて宝塔はいかがすべきと物語りつつ隨身の人の掌に渡しぬ。隨身の者も幾度か押頂いて、生年二十八歳初めて親く仏舍利を掌中に頂きぬとて歓ぶこと限無し。住僧曰く、吾れは象牙の環に仏舍利を藏むるよう彫り込めたるが、中に残りの仏舍利を藏むべし。この黄金の宝塔は隨身することすでに十有三年、未だ一日も仏舍利とともに肌を離ちしこと無し。嘗つていかなる時にもこの宝塔を他人に与うべしとは思わざりしが、今夜歓喜いよいよ募りて、遂にこの宝塔をも添えて授与せんと欲するの心になりぬ。幸に護持せられよと云いぬ。吾れ等は感

謝の言葉もなく夢より夢に入りし心地になりて、その宝塔のままに頂戴して答えて曰く、吾れ等かねて仏足山、寒霞溪に宝塔建立の大願あり。この仏舍利をその宝塔の中に藏めて祀るべしと云いぬ。此所の宝塔に安置し奉る仏舍利も、寒霞溪の宝塔に安置し奉る仏舍利も、ともに仏足山中の仏事なり。分布舍利の如来の御方便に非して何ぞや。

熟ら事の心を案するに、吾れ等はただ一夜の宿を求める他國の者にすぎず。僧とは自称されども汗に塗れ、雨に濡れて宛も一個の苦力の如く沢山の荷物を負える旅人に過ぎず。すでに夜半に及べば、仏舍利を隨身し奉る話をすることすら慎むべきものなるに、却って直ちに仏舍利を拝観せしむるのみならず、やがて分譲せしめ給う。分譲するに当つて永年隨身の古宝塔をさえ添えられぬ。未だ双方ともに姓名すら聞き及ばざりける間柄ならずや。分譲して住僧も歓喜の情やみ難くやありけん、居室に入りて戸をたてたる中にて切りに經文を一人誦し始めたるらし。

我が伝持せる日本の仏法、果して如来の本意に叶えるの証明か、西天に日本の仏弟子に由つて仏法を復興せしめ給うべき勅命か、不思議の現象に非して何ぞや。もし我れ位置を代えて仏舍利を護持したらんに、たとい他國の僧が我が庵室に投宿することありとも、決して仏舍利授与の心は得起るまじくおぼう。日本國の何れの御寺に往けばとて、かかることが千年に一度も起り得るぞや。不思議の出来事ならずして何ぞや。

住僧語つて曰く、仏舍利はこれ生身の如来なり。今より生身の釈迦牟尼仏陀、貴師等の傍に居させ給うぞ。いかなる嶮難にも憚りなく、いかなる魔障にも畏れ無けん。我れこの仏舍利を得てより、或は深山にて猛獸に会い、野象に会えりしと雖も、咸く危害を免れたり。一夜盜賊この仏舍利を盜まんとせしかども遂にその盜難をも免れたり。皆仏舍利の靈験威徳なり。信心に護持し奉らば貴師等も靈顯を感じらるべしと語られぬ。

授けたり。日本より隨身し来れるものと云う。吾れもこれを得て歎喜倍増せり、とて珊瑚の念珠を取出し頸にかけて檀越に示しぬ。檀越もまた隨喜してやまず。凡そ所有る仏舍利伝來の因縁を聞く者誰れか喜ばざらむ。セイロンの僧より日本の僧に伝來せる仏舍利一粒は實に歴史的の両国仏法の接触にして、奇蹟的心現象の間に授受せられたんぬ。吾れ一代の間に於て未曾有の大歎喜を得たり。あまりに遠く隔たれる国と國との無名の僧と無名の僧との間に、生身の釈迦牟尼如来は大悲無窮の方便を施し、一粒の仏舍利と化して、常住三宝の功德を示現し給えり。僧宝常住なるが故に仏宝常住の不思議もあらわれぬ。僧宝常住なるが故に法寶もまた常住して、五濁爛漫の三惡道を輪転摧破するなるべし。セイロンの仏法衰えたるに似たりと雖も、而も猶かくの如きの高僧大徳、その影を白雲の中にひそめて六波羅蜜の修行三昧に精進勇猛なり。

僧伽あんぎやに行脚の修行あり。善智識を訪ねて十方に請益するの方便なり。

城邑聚落じょうきゆうらくにそれ法を求むる者あらんに、直ちに其機に応じ、往いて如來の正法を宣説するの導師なり。我れ若し行脚の修行を廃せば、たとい百千万遍仏足山に登るとも遂にこの如きの道場の存在をすら知らず止むべかりける。行脚の因縁に由つてこの道場に宿り、この高僧に会い、結局仏舍利、宝塔、鉢宇感得の縁起を得たり。行脚の功德とは仏舍利感得の方便なり。行脚の功德とは西天開教の精進なり。行脚の功德とは僧宝常住の悟道なり。行脚の功德とは能竊のうくわい為一人の説法なり。行脚の功德とは應身如來常住不滅の信解体得なり。行脚の功德とは遊行無畏の試練なり。行脚の功德とは十方世界通一仏土の大觀なり。

日本山妙法寺の創立は行脚の功德の証明なり。日本山の弟子檀那と称する者、次第に寺門經營の名を以て一山一寺

に、止住する者あたか怡も既成寺院の活計と異なる所なからんとす。その積む功德はその罪障の千分一にもあたらざるべし。名を日本山に藉りて唯だ仏法衰微の魔事をのみ巧む者なり。魔事を好む者は一山一寺に止住せんことを樂う者なり。恥すべきはなはだの酷しきなり。かたけな悉くも教主釈尊、拘尸那城の御入涅槃、高祖日蓮大聖人池上の御入滅、何れも行脚の功德の表現のみ、仰いで信ずべし。

仏足山とは行脚の功德の教壇なり。神通遊化とは行脚の功德の自在なり。吾れに行脚の修行ありて、近くは西天開教の大誓願、遠くは一闇浮提皆帰妙法の大誓願海をみたすことを得しむべし。瑞相既に虚しからず。仏事必定して成就すべし。英國官憲の猜疑心も、日本總領事館の怨嫉も、なお猪の金山を擣るが如きのみ。何れも皆我が大誓願の光明点を延長せしむるに過ぎざらむ。げに太陽を射る者とは、これ等内外の天子魔軍の悪党のみ。汝自ら権勢に拋つて正義と思えり。何ぞしらむ。正義は毎に権勢に対抗する彼岸に存在することを。権勢に迷うて覚ること能わざる者よ、看よ、百年後の歴史の批判を。抑も日本と西天との親交の鍵は汝等の掌にありしや、我れ等が掌に在りしや。西天を惱ます者、日本国をあやまつもの、そは今日権勢を弄して悪念を凝らす天子魔軍の悪党原か。

日本山の邁進する西天開教の大王道は唯仏世尊の印綬を佩びぬ。汝等酒くるいの批難には拘泥する所なし。信ぜずば待て、この西天と極東日本とを通じて一仏土の清淨安穩の風光を、國土世間と衆生世間とに亘つて事実に現前せしむる日を。

仏舍利感得は日本の仏法、立正安國論の諫めの鼓なり。仏舍利感得は西天に遣使還告の印綬なり。凡僧なりとて卑下すべからず。龍樹、天親、四依の薩埵さつだにさえ附囑し給わざりし深重の勅命を負える身ぞ。驕慢と云うか、妄想と云

うか、事の一念三千の仏果円成の淨土現前のみ。唯だ我が念願を導くにこそ、印度に立正安國を、セイロンに立正安國を、バルマに立正安國を、併して全大亞細亞に立正安國を、結局一閻浮提を、末法万年五濁の黑暗の中より立正安國ならしめ奉らむ。これはこれ釈尊、法華經の御予言にして、高祖日蓮大聖人の末法出現の面目なり。我れ不肖なりと雖も甚だ深くこの金言を信じ、この誓願を信じ奉る。

八月二十五日は月こそ違え、悲母行阿院日蘇大法尼の御命日なり。八月二十六日は陰曆の七月六日にて月こそ違え、我が誕生の日とききぬ。悲母の御遷化の夜と我が誕生の朝と、陰陽両重の暦法に由つて、西天開教の仏事の上に、四海帰妙の仏事の上に、閻浮統一の仏事の上に、割期的なる不可思議の吉祥瑞相を感じ得したり。悲母の悲愍のあらわれか、我が孝養の一分か。衆の無智の人、領事館以下の日本人すら悪口罵辱の真唯中に於て、貧窮乞食の暮しのなかに於て、我れは刻々に須弥山にも比すべき我が修行弘通の功徳を得たり。

我れこの歓喜と満足と希望と理想と信念とを以て立つ時に、踏みしめたる脚下より、常寂光土に通う清涼の風は吹きそめぬ。あらうれしや、あらうれしや。

### 国土を厳淨して衆生を成就せしめん

#### 宝塔湧現

日本国九州の中央、名にし負う花岡山に、宝塔が湧現した。その宝塔は、高広ともにインドのサンチの宝塔と略ぼ同じ寸法であった。その開眼供養は去る昭和二十九年四月八日、桜花らんまんの中に於て万国の平和者を集めて營まれた。それより以来四、五カ年を経る間に、日本全国北は北海道から南は九州に至る迄、各大都市に宝塔建立の機運が漲つた。その勢は宛も月の出に潮のさすが如く、春の野に草の萌え出るが如くである。これ蓋し日本国の平和建設の瑞相として、且つは以て世界人類の平和に寄与するものとして、世界の平和を求むる人々は、齊しく日本国に起れる宝塔建立の大仏事の進展を仰ぎ眺めて居る。

現代人の總てが猜疑と恐怖とに充たされたる殺人文明の窮途を転換して、人間社会に相互に尊敬と信頼との美わしき生活の門を開かんが為に、礼拝と供養との功德善根を教え、国土を厳淨して園林諸の堂閣、種々の宝を以て莊嚴し、現世ながら仏國淨土たらしめるが為に、宝塔建立は經營さる所以である。

法華經には、正しく現代を指して闘諍堅固、白法隠没の恐怖惡世と定め、この苦患の海から一切衆生を度脱せしめんが為に、この法華經は一閻浮提内に廣宣流布するという未來記がある。法華經の廣宣流布は閻浮提内在々所々に、多宝仏塔が湧現して、この国土を変じて清淨ならしむることを意味する。

#### 懺悔清淨なるもの宝塔を挙す

今法華經本迹二門の流通分並びに觀普賢經の要文數條を抄録して、一には宝塔建立に精進する一門の人々の用心に備え、二には宝塔建立に耳を惑わし心を驚かす人々の疑惑を解かんが為にする。